
ウルトラマンメビウス&ウルトラマンゼロ ~ゼットン星人の遺産~

棒人間

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウルトラマンメビウス&ウルトラマンゼロ くゼットン星人の遺産

【Nコード】

N7811Y

【作者名】

棒人間

【あらすじ】

メビウスとゼロは惑星探査のため、N25星に向かう。そこは一面が緑の美しい星であった。しかし、2人は恐るべき計画が立てられていることは知らなかった・・・

プロローグ 磁力怪獣 プロネット

宇宙には色々な物が飛ぶ。

流れ星に宇宙船、惑星だつてその一つだ。

今、一機の円盤が隕石群にレーザーを放出しながら飛んでいた。

レーザーによつて破壊されていく隕石の残り屑は、たまに円盤に当たるがそんなことも気にしないで作られていく道を進んでいく。

だが、円盤は後方から迫ってくる隕石に気がつかなかつた。

その隕石はゆつくりと移動しているように見えた。

しかし実際にはかなりのスピードで近付いていく。

徐々に、徐々に……。

その距離が1キロ辺りになった時には、さすがに円盤は後ろから来る小さな驚異に気がついたようだ。

円盤はそれを避けるために機体を傾け、回避行動を取り始める。

それが命取りとなつた。隕石は突然狂つた生き物のように円盤に向かって、突進したからだ。

為す術もなく円盤は隕石とぶつかつてしまった。

幸い爆発はしなかつたが、大きな窪みができ機体は墜落していく。

円盤は近くの巨大な小惑星へ激しい砂煙と共に不時着した。

円盤内では地球人の姿をした宇宙人が4人いて、全員倒れている。

その内の一人、顔はとても若く見える 男性が頭を両手で抑えながら立ち上がった。

「いてて。何なんだよ、今のは……」

男性は窓から外を見る。

そこに見えたのは、ムクムクと動く黒い影。

男性は目をこすった。

あれ、さっきの衝撃で俺の目おかしくなったのかな？

しかし、擦っても擦っても影は消えない、むしろはっきりと見えた。さらには大きくなっている。

男性は嫌な予感を感じた。

それと同時に彼は機内を走って、僅か5秒程で操縦席に座った。その近くの窓にも影は先程と比べはつきりと見えた。

男性の予想は当たっていた。

影は怪獣だった。

尻尾があり、体全体は黒くてとても固そうな鱗に覆われている。

顔はまるでライオンのように凶暴そうで、右に2つ、左に2つ合わせて4つも目があった。

口からは黄緑色のよだれを垂らし、それが地面に落ちると小石が生きているかのように引っ付いていった。

そんな怪獣が円盤に向かって走ってきているのだ！

男性はパニックに陥った。

そして、この場から逃げ出そうと操縦桿を握り占め、エンジンを入れようと色々なスイッチを押した。

が、どのスイッチも反応はしない。

まさか先程の衝突が原因か、男性はそう思ったが、即座に否定した。

それは絶対にありえない。

この船は衝突により機体が凹むことがあっても故障は起きない。

じゃあ、何が原因だ！？

彼は機体を制御するためのメーターを見た。

メーターはあり得ない数値を表していた。

普段なら絶対に出さない、出すとしたらかなりの磁力が必要だ。

磁力・・・、怪獣が出したよだれ・・・

男性は少し冷静になっていた。

そして、思ったことを仮定を立てていく。

よだれに引っ付いた小石。

この小石が僅かに磁力を持っていたとしたら？

彼はもう一度メーターを見る。

メーターの数値は上がっていた。

イカれてる、そう思って仮定は結論へと変わった。

怪獣自体が強力な磁力を持っているのだ。

円盤に衝突した隕石は怪獣が操っていたのだろう。

そして、男性は思い出した。

怪獣は伝説上の生き物と思われていた、磁力怪獣
プロネット
なのだ。

彼にはそれしか考えられなかった。

プロネットはさらに近づく。

男性は全てを諦めた。

もう自分達は死ぬ、奇跡が起きない限り。

男性は窓から宇宙を見上げた。

赤い流れ星が見える。

何故か彼は安心した。

その流れ星は見るだけで心を落ち着かせた。

そして、目を閉じた……………。

目を開けたとき、自分は天国にでもいるのだろう、そう思っていた。しかし、体の感覚はある。

額から流れる汗が目に入った。

彼は目を拭いた。

そして、まだ自分が生きていることを知った。

もう一度窓を見ると、今度は赤い柱が見えた。

ブロンネットは柱の後ろにいる。

彼はもつと上を見上げた。

彼の瞳に映る者、それは銀色と赤色のした巨人だった。

男性は叫んだ。

「あれは……………ウルトラマン!!」

第一話 小惑星の戦い（前編）

磁力怪獣 プロネット

赤と銀色の巨人　ウルトラマンメビウス　は円盤の前に立ちプロネットを体の全ての力を使って止めていた。

プロネットはメビウスよりも大きく、少しでも力を抜いたら自分は押されてしまう、そう彼は考えた。

しかし、このまま粘ってもいつかは負けてしまうだろう。だったらプロネットを一旦転ばせれば良いだけだ。

メビウスは左足に力を入れながら右足を少し上げると、そのまま怪獣の足を払った。

プロネットは両足に力を入れていたため左足が浮いた瞬間、勢い良く倒れてしまった。

「よし、いいぞ！」

円盤に乗っていた男性はメビウスに向かって（もちろん聞こえないと分かっているが）叫んだ。

しかし、メビウスはそれに気づいたのか、窓の向こうにいる男性に頷く。

男性は最初、ありがとうと言う意味だ、そう思った。

（いや違う、もしかしたら今の内に船を直せ、と言っているんじゃないか？）

だったら行動をするべきだ。

彼は先ほどまで倒れていた場所まで走ると、仲間たちを起こそうとした。

「おい、起きろ！寝てる場合じゃない！」

男性は一人一人の体を揺らしながら、叫んだ。
それを三十秒ほど繰り返すと・・・

「う、うん」

倒れていた一人（男性より少し若い）がゆっくりと起き上がった。

「……………あれあれあれ、なあなあピロ、俺気絶してたんか？」

その香気そうな声に、ピロと呼ばれた男性は呆れ顔をした。

「ふざけんなよ！ホーロ！いいか、よく聞け」

ピロが言葉を言い切ることが出来なかった。

何故ならホーロが窓（正確には転んだプロネット）を見ながら叫び始めたからだ。

「何だよ、あれ！？怪獣！？ちよちよちよちよちよと待て待て待て待てー！！何が起こった！？いつ現れた！？どこからやって来た！？どうしてこっちを向いてる！？どうやって俺たちを食べるんだ！？うわー！もうおしまいだあー！！みんな死ぬ死ぬ死ぬー！！！！」

ホーロの叫びはとにかくうるさい。

その騒音は空気を震わせ、操縦席の近くにあった色々なファイルを吹き飛ばし、まだ気絶していた二人を起こすほどであった。

「落ち着け、ホーロ！……………いいか、怪獣は確かに俺たちを襲おうと

している。だけど外をよく見てみる！」

しかしホーロと他の二人の目には、既にプロネットの顔に蹴りを入れるメビウスの右足が映っていた。

残りの二人は見てとても驚いた顔をしたが、ホーロは・・・

「うわー！ありゃきつとウルトラマン、ウルトラマン、ウルトラマンだ！助かった助かった助かった！！皆生きれる生きれる生きれるうー！！！！！」

ピシリ、どこかで窓が割れる音がした。

ピロはそんなことお構いなしに、仲間達に向かって叫ぶ。

「いいか、俺たちの船は多分あの怪獣の磁力によって狂わされちまった。だが俺たちはトラベ星人だ！こんな程度、簡単に直せるだろ！」

ホーロ以外は彼の言葉に同意するように頷いた。

「磁力で狂った宇宙船は同じ磁力磁力磁力う！で直すのが基本中の基本中の基本中の基本だよねえ！！！」

ホーロ達は機械を調節する為、一目散に走り始めた・・・。

メビウスは右手を使って、プロネットに強烈なパンチを繰り出した。パンチは顔に直撃し、ほぼ丸に近いプロネットはごろごろと後方へ転がっていく。

とにかくプロネットを円盤から引き離すことが大事だ。

そうメビウスは考え、プロネットを追っていく。

プロネットまでの距離は約300m。

その時に何とか足を地面に着け、プロネットは両手で頭を痛そうに抱えると、憎しみを込めた目でこちらに向かつてくる巨人を睨んだ。そして自分の尻尾で近くにあった30mほどある巨岩を勢いよく粉砕した。

バラバラになった岩の大きさはまちまちだ。

プロネットの前に生きているかのようにゆっくりと漂う岩には、プロネットの口から吐き出された唾液がかけられた。

怪獣は大きな目をゆっくりと瞑る。

すると、岩はミサイルのようにメビウスを狙って飛び始めたのだ。

だいたい時速100kmはあるだろう、走っていたメビウスは避けることが出来ず全身に岩を食らってしまった。

岩は当たるごとに爆発を起こし、メビウスはただダメージを受けるだけ。

前方に倒れそうになるが、彼は左手を使って体を支える。

「くっ・・・」

息切れをしながらもメビウスはプロネットを見た。

プロネットはすぐにもメビウスに止めを刺そうと巨岩を尻尾で破壊していた。

今度は自分の視線をメビウスブレスに移す。

策は一つ、今はプロネットの行動を待つしかない。

メビウスは跪き、静かに待った。

プロネットの目には動かなくなった巨人を不審に思った。

(何故、敵は動かなくなった?)

(まるで狙ってくれ、と言わんばかりではないか。)

(だったら望み通り攻撃をしてやるう。)

(岩は砕いて、唾液はかけて準備は万全。)

(後は臉を閉じて石を前にやるだけだ。)

再び岩がメビウスを襲おうとしていた。

今度喰らったらウルトラマンは怪我をしてしまうだろう。

ピロは操縦席から聞こえないと分かっているにもかかわらず、大声で叫んだ。

「逃げる、ウルトラマン！」

メビウスは逃げなかった。

その代わりに彼は岩との距離があと5mの時に、メビウスディフェンサークルを展開して自らの身を守ったのだ。

岩は光の盾に当たって爆発をして、無念と言わんばかりに煙を出す。ブロンネットは煙しか見えない。

その為にメビウスはダメージを喰らったと勘違いをしてしまった。

煙の中では何が起こったか、ピロでさえ分からなかった。

死んだのだろうか、とあってほしくない考えが彼の頭に横切る。

(だったらホーロの言う通り死ぬのか・・・)

その時、未だに残留しているモヤモヤから光が見えた。

最初は微かにであったが、徐々にはつきりと見える。

2秒ほど経つと『8』の文字を横にした感じで形を変えた。

ピロは自分の顔が少しにんまりしていることに気がついた。

それは突然（少なくともブロンネットにとっては）起きたことだった。白色で何も見えない空気が流れる場所からオレンジ色の光線が飛んだからだ！

同時に煙は吹っ飛んだように拡散し、中には両手を十字に組んで必殺技「メビウムシユート」を放つメビウスがいた。

光線が右肩に直撃したのはあつという間、タイムで表すなら0・01秒だろう。

すぐに爆発し、ブロンネットは悲鳴を上げた。

光線を撃ち放ったメビウスは、両手をゆっくりと降ろした。だが、メビウスはすぐに気づく。

ブロンネットはまだ動いていたことに！

「そんな!？」

確かに右肩の爆発した後にはヒビが入っている。

しかし、ただ『入っている』だけなのだ。

ブロンネットの目で再びメビウスを捕らえた。

口からは唾液が大量に溢れ出す。

恐らく、いや絶対に唾液は岩にかける気だ。

それより前にもう一度メビウムシユートを撃っても効果はない、足止め程度だ。

……メビウスはまたブロンネットに向かって走り始めた。

そして陸上選手のように高くジャンプした。

とても堅い敵に対して、メビウスには一つの切り札がある。

その名は『メビウスピンキック』。

その技でメビウスはブロンネットを鱗ごと破壊しようと言うのだ。飛び上がって高度を増す。

そのまま降下をしながら宙で一回転をした。

メビウスの目に映ったのは緑色の一本の光線が現れて、すぐにプロネットの顔に直撃した瞬間だった。

それが原因でまたしてもプロネットが倒れてしまった。

光線自体には見覚えがあった。

それは誰の物を当てるのは少し難しい、メビウスはそう思った。

プロネットが先ほどまで倒れていた場所に着地すると、何となくプロネットと距離を取るため後退をした。

すると、まだ若く荒っぽい声が響く。

「遅いぜ、メビウス！」

その声を聞いたとき、メビウスは心の底から安心した。

何故なら彼は……

「そう言う君はタイミングが悪いよ、ゼロ！」

ゼロと呼ばれた赤と青、そして銀色のウルトラマンは小惑星の真上から、仲間であるメビウスの場所に着陸した。

「へっ、あんたがあまりにも遅すぎたせいで俺は迎えに来てやったんだぜ。むしろ感謝してもらいたいね」

改めてゼロは立ち上がったプロネットを見ると、さらにメビウスに話しかけた。

「しっかしあんな弱そうな奴に苦戦してるなんてあんたらしくない

な。そんなに強いのか？」

「うん。それにほら」

メビウスは指をピロたちの宇宙船に向けた。

それを見たゼロは腕を組んで頷きながら、こつこつ答える。

「ああ、なるほど。メビウスらしいぜ」

親指を使って口を拭くと、ゼロは頭部に付けている二つの武器『ゼロスラッガー』に触れ、一本ずつ力を入れながらプロネットに投げた！

第一話 小惑星の戦い（前編）

磁力怪獣 プロネット （後書き）

少し、説明を

トラベ星人

既にご存じの方もいると思いますが、この宇宙人は僕の作品の一つ『ウルトラマンツイン』第四話で出したオリジナル宇宙人です。

この話でトラベ星人が乗っていた宇宙船は怪獣でしたが、今回は生きていないただの宇宙船です。

出した理由は、ちょっとしたお遊びです（『ガイア』で登場したらくだ便が『ダイナ』のOVで登場したのと一緒の類）

『メビウス&ゼロ』は前後編のやり方を取るため、これからも良いところで終わると言うことがあります。

そのところはご了承ください

それでは

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7811y/>

ウルトラマンメビウス&ウルトラマンゼロ ~ゼットン星人の遺産~

2011年12月18日17時51分発行